様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３７４０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６８７０７９２

研究課題名（和文）「文検」體操科の研究

研究課題名（英文）A Study for Secondary School Gymnastics Teacher's Certification Examination

研究代表者
栗原　武志（KURIHARA, TAKESHI）

熊本学園大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：４０４３５３１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、戦前の教育、教員養成の一つの流れを形成した制度である「文検」、この検定試験における體操科の全体像を明らかにすることを目的とした。その成果として、「文検 」體操科の受験者の勉強方法や心得、受験動機、受験にあたっての困難等を、試験問題や受験雑誌掲載の合格体験記による分析をとおして明らかにすることができた。さらに、一部ではあるが、中等及び初等體操科の実態も、受験記から明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to clarify the "Gymnastics in Secondary school teacher’s certification examination" which is a system which formed one flow of prewar education and teacher training, and the whole picture of the gymnastics in this examination test. As a result, it is possible to clarify the examination method and knowledge of examinee of the gymnastics in secondary school teacher’s examination , difficulty in taking the examination motive, examination etc through analysis based on the examination question and the passing experience report of the examination journal entry It was. In addition, although it is a part, the actual condition of the secondary school and primary school gymnastics course could also be clarified from the examination.

研究分野：体育科教育学

キーワード：文検　體操科　教員養成

１．研究開始当初の背景

「文検」については、「『文検』の姿が見えてきた」（吉田文「『文検』試験問題の研究－戦前中等教員に期待された専門・教職教養と学習を読んで」、『日本教育史研究』第 23 号、2004 年、105 頁）と評されたように、ここ 10 数年の間に研究の成果が認められるようになった。研究を推進したのは、寺崎昌男と寺崎が組織した「文検」研究会であるが、同研究会は、分析に未着手の多くの学科目を残したまま活動を休止した。

「文検」とは、「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」の略称のことであり、戦前の教育、教員養成の一つの流れを形成した制度である。以下「文検」の略称で呼ぶ。

では、なぜ「體操科」なのか。それには三つの理由がある。一つは、明治から大正、昭和初期、第 2 次世界大戦前までの中等教育現場における體操教育の実態および歴史的性格を解明したいということである。例えば、教育勅語に集約された理念を體操として教授した小学校と、體操科の背後にある体育学の研究成果を教育した大学の間に位置する「半ば学問、半ば教育」といわれる旧制中学校において、體操教育はどのように行われたのであろうか。それは他の校種（高等女学校や師範学校や実業学校）と同じなのであろうか、どのように異なっていたのだろうかというような疑問に対し、残念ながら体育（教育）学界は解答を持ち合わせていないのである。

いま一つの理由は、申請者の研究環境を生かしたいということである。「文検體操科」の研究が空白状態であることに申請者は数年前から気づいており、学内における個人研究費を使用し、小規模かつ遅歩ではあるが、研究を進めてきている。これまでの研究で、「文検體操科」の試験問題の復元や試験委員の特定、並びに「文検」受験用参考書の収集などを進めており、一定の資料整備が進んでいる。また、本申請研究に対して助言者として協力をいただく神戸大学の船寄研究室には、「文検」研究会の活動の間に収集された「文検」受験者用雑誌である『文検世界』『文検受験生』がかなりの分量所蔵されている。また、「文検體操科」における合格者名簿等も保存されており、研究を進める上で貴重な資料であるので有効に活用したい。

そして、もう一つの理由は、文献「體操科」が未だ解明されていないからである。「文検」研究会の共同研究再開が機を熟すのを待つ間に、個人研究をできるだけ進めたいと考え科研費に応募し研究を開始した。

２．研究の目的

本研究は、「文検」體操科の全体像を明らかにすることを目的とした。具体的には、制度の開始（1885＝明治 18 年）から終焉（1949＝昭和 24 年）までの全期間を対象に、「文検」體操科の制度、試験委員、試験問題、受験者等について解明しようとするものである。

「文検」研究開拓の必要性をいち早く示唆したのは寺崎昌男であった（日本教育学会教師教育に関する研究委員会編『教師教育の課題』明治図書、1983 年）。寺崎は、1986 年に「文検」研究会を組織して研究に着手し、その成果が『「文検」の研究』（学文社）として 1997 年に公刊された。同書は「英語科」「数学科」「歴史科」「家事及裁縫科」「公民科」の各学科目を取り上げ、広範に「文検」の検討を行った。

同研究会はその後活動休止状態にあるが、中等教育の基幹に位置していた「修身科」、最大の受験者数を抱えていたと思われる「国語及漢文科」、「独語」「仏語」など語学系学科目、「物理科」「化学科」「博物科」など自然科学系学科目、さらには「図画科」「手工科」「體操科」「音楽科」「習字科」など実技系学科目などの分析が残されている。中でも「體操科」は、戦前體操教育に果たした役割の大きさからいえば、その分析が最も急がれ

るといっても過言ではない。

「文検」體操科は本来中等教員養成の仕組みであり、それを解明することも本研究の目的であるが、それにとどまらず、「文検」體操科を体育学研究（試験委員の大学という場における研究)、「文検」體操科の試験問題（国家検定試験という枠内で問われる体育学)、受験生の受験動機（中等教員の社会的地位獲得という上昇志向性、教員資質の向上意欲など）の三者の結節点としてとらえ分析する点に、本研究の特色と独創性がある。

これらの研究成果は、教育学研究・体育学研究に大きな貢献をするとともに、近年社会的に問われている教師教育の質的保証や学校体育における教育責任の確立などへも波及効果が期待できる。

３．研究の方法

本研究では、「文検」體操科について、(1)制度史の解明、(2)試験問題の分析、(3)試験委員の分析、(4)受験者の分析、(5)「中等體操」の実態の解明の５つの作業課題の遂行を通して迫ろうとするものであった。

本研究は、研究目的の解明のために次の五つの作業課題を設定した。

(1)「文検」體操科の制度史の解明。
①試験実施に関する法令の整理
②試験日程の整理
③受験者統計の整理
④合格者氏名の整理

(2)「文検」體操科の試験問題の分析。
①受験雑誌掲載の試験問題の分析欄の分析
②受験雑誌掲載の受験（合格）体験記による指摘の分析
③受験雑誌掲載の模擬試験欄の分析

(3)「文検」體操科の試験委員の分析。
①試験委員の確定
②試験委員の著作の収集と分析
③受験雑誌に掲載された試験委員の言説の分析

(4)「文検」體操科受験者の分析。
①受験の動機
②受験者のキャリア
③受験勉強の内容
④合格後の進路

(5)中等體操の実態分析。
①體操科参考書の収集と分析。分析にあたっては、中学校・高等女学校・師範学校・実業学校の共通性と異質性を意識する。
②中等體操に関する言説の収集と分析。とりわけ體操科授業を受けた生徒自身の言説の収集に留意する。

上記の作業課題は、資料の収集と分析が比較的短期間に行えるものと長期間にわたるものに分けることができる。(1)(3)(4)が前者に、(2)(5)が後者に属する。(1)(3)(4)を研究期間の前半（１年６カ月）に集中して遂行し、(2)(5)については資料収集を研究開始当初から行いつつ、３年目に分析を集中的に行うこととした。具体的な年次計画は以下のとおりであった。

【平成 26 年度】

作業課題(1)を遂行する。これまでの「文検」研究の蓄積を踏まえ、作業は手元もしくは神戸大学船寄研究室にある資料を整理することが中心となるため、年度前半で作業を終える。年度後半からは作業課題(3)(4)に着手する。このうち(4)については、「文検」受験用雑誌である『文検世界』『文検受験生』『内外教育評論』の閲覧を行うことになるが、3 誌とも神戸大学船寄研究室にほぼ整備され

ている。作業課題(3)については、試験委員の著作リストを作成するが、体育学関係の雑誌論文などを渉猟する必要があるため少なからぬ時間を要すると考えられる。したがって、年度後半から着手し翌年の半ばまでに完成を予定したい。作業課題(2)(5)に着手する。

【平成 27 年度】

前年度に終了予定であった作業課題を遂行する。前年度からの継続作業である作業課題(3)を遂行する。作業課題(2)(5)を遂行する。

【平成 28 年度】

年度前半までに作業課題(2)(5)について前年度の継続作業を行う。

４．研究成果

本研究は、「文検」體操科の全体像を明らかにすることを目的とし、制度の開始（1885＝明治 18 年）から終焉（1949＝昭和 24 年）までの全期間を対象に、「文検」體操科の制度、試験委員、試験問題、受験者等について解明しようとするものであった。

成果として、「文検」體操科の試験問題の分析は終了し、また受験雑誌掲載の合格体験記による受験者の勉強方法や心得、受験動機、受験にあたっての困難等を明らかにすることができた。さらに、一部ではあるが、受験記から見ることができる中等及び初等體操科の実態も分析できた。これらは、当時の教員の資質向上等にもつながる生の言説を明らかにすることであり、今日においても、その資質向上の取り組みは、教員養成等に参考に値する意義あることであり重要な視点であると考える。

また、研究を進める中で、先行研究において、試験委員と試験問題の関係や、 試験委員の考え等は明らかにされておらず、女子受験者の実態や体験記等の分析も見当たらなかった。また、合格者の記事は多く見られたが、受験失敗談の記事等の分析はないこと。文検受験者の為の学習ネットワークや講習会などを分析した研究も見当たらないことなどが確認できた。

よって、事業期間終了後も引き続き研究を重ね、申請時の研究計画を達成できるように真摯に進めていきたい。特に、研究期間の途中、平成 28 年 4 月に起きた熊本地震の影響により、研究を中断せざるを得なかった時期（研究室内の破損や資料散乱と それに伴う変則的な授業期間）が長期にあり、科研費のおかげで研究資料は十分に収集し分析できたが、論文としてまとめ学術誌への投稿や学会発表といった当初の計画が十分達成できていないので、近年中最優先課題として進めて行きたいと強く考えている。

〈文献〉

寺崎昌男（1983）教師教育の課題、明治図書
寺崎昌男（1997）「文検」の研究、学文社
吉田文（2004）「文検」試験問題の研究－戦前中等教員に期待された専門・教職教養と学習を読んで、日本教育史研究第 23 号：105－109

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6 件）

① 栗原武志（2018）保育者養成課程における保育表現のあり方に関する一考察－身体表現活動分野における演劇活動を中心として－、保育者養成実践研究（1）：15－23、査読無

② 橋本公雄・栗原武志他（2016）身体障害者を対象とした健康科学科目（保健コース）の受講に伴う自己成長－事例研究－、熊本

学園大学論集「総合科学」第 21 巻第 1 号：69－85、査読有

③ 橋本公雄・栗原武志他（2016）学生生活 QOL 向上に向けた因果モデルの構築－メンタルヘルス、学業、生活習慣、心理社会的変数を用いて－、熊本学園大学付属社会福祉研究所「社会福祉研究所報」第 44 号：75－96、査読有

④ 栗原武志（2016）教員免許更新講習における幼稚園教諭のニーズに関する一考察－身体活動分野における課題意識調査をとおして－、熊本学園大学論集「総合科学」第 21 巻第 2 号：63－74、査読有

⑤ 栗原武志（2016）シンガポール日本人学校設立の歴史と身体活動の現状及び諸問題－小学部クレメンティ校の現地調査を通して－、熊本学園大学付属社会福祉研究所「社会福祉研究所報」第 44 号：49－74、査読有

６．研究組織

(1)研究代表者

栗原　武志　　（KURIHARA TAKESHI）
熊本学園大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号：40435318